

あ と が き

昭和四十六年七月、苫小牧市史は『上巻』、『下巻』、『資料編』によって構成し、四十八年八月の本市開基百年には『上巻』を発刊する計画のもと、堀江敏夫編集長、佐藤一夫編さん員、扇谷昌康編さん員による新編さん体制によって進めることになった。

しかしながら、調査、史料（資料）収集には幾多の困難があり、当初予定した昭和四十八年八月の『上巻』発刊は難しいものとなり、これを一年遅らせ、開基百年には『目でみる苫小牧の百年』をその記念誌として発刊することにしたのである。なお、同四十九年四月には『下巻』および『資料編』の作業を進めるべく神田正五編さん員が加わった。

昭和四十六年、四十七年には調査、史料（資料）収集に全力をおき、高知県高知市、岐阜県下呂町、東京都（八王子市、国立国会図書館、内閣文庫、文部史料館）、宮城県仙台市、青森県弘前市、函館市、札幌市、江別市、釧路市、室蘭市などにおよんだ。四十八年には執筆と調査を平行して行い、四十九年には本格的な執筆に入った。

執筆にあたっては、本市の歴史的特徴に主眼をおき、全体的視野に立って苫小牧の占める位置、道史とのつながり、関連性を、さらに住民活動面におけるそれまでも描き、その中での制度や法規面における諸事項までと思ったが、これらについては調査不十分などもあって満足なものとはいえないものになってしまった。

また、各編において執筆方法が若干異なる点もあるが、これは各編さん員の史観と持ち味を生かし、著しい統一性を欠くもののほかは、これを尊重した。

各担当編さん員は第一編自然環境、第二編先史時代を佐藤一夫編さん員、第三編アイヌ時代、第四編幕藩時代を扇谷昌康編さん員、第五編行政史、第六編産業史を堀江敏夫編集長があたり、各編において調査員などによる部分執筆をうけたが、これらの中には担当編さん員、編集長において削除、補足執筆した部分があった。なお、各執筆者は次のとおりである。

苦小牧市史 上巻 執筆者一覧

編名	章節名	執筆者	備考
第一編 自然環境	位置と面積 気候 地形 地質と地史 火山と地震 植物 動物	編さん員 佐藤一夫 佐藤一夫 佐藤一夫 調査員 藤田郁男 藤田郁男 調査員 中居正雄 編さん員 神田正五	苦小牧市青少年センター学芸員 砂川北高校教諭 恵庭南高校教諭 苦小牧郵便局貯金課
第二編 先史時代	概説 遺跡および遺物	佐藤一夫 佐藤一夫	

第三編 アイヌ時代	和人の蝦夷地進出とアイヌ 苫小牧地方のアイヌ	編さん員 扇谷昌康 扇谷昌康	苫小牧東中学校教諭
第四編 幕藩時代	松前藩と勇払 幕府直轄と勇払 八王子千人同心の移住 勇武津不動と千人同心墓碑 松前家復領と勇払 幕府再直轄と勇払	調査員 菊池新一 扇谷昌康 扇谷昌康	北海道栄養短大教授
第五編 行政史	行政制度の変遷 財政と議会 人口と町名地番	編集長 堀江敏夫 堀江敏夫 堀江敏夫	苫小牧市市史編さん係長
第六編 産業史	農林水産業の変遷 工業と鉱業の変遷	堀江敏夫 堀江敏夫	

市史の史料（資料）収集にあたっては関係機関のご協力と市民各位のご援助によって相当数にのぼり、いざ執筆に入るとこの史料もあの資料も捨てがたいということで、市史編さん委員会に提出した草稿はかなりぼう大なものとなったが、規定のページ数もあり、縮小のやむなきにいたった。市史上巻では当初一、六〇〇ページということになっていたが、その後において一章をふやしたい、あの個所を補足執筆したい、よい写真が見つかったから、図版も入れたということ、相当のボリュームになってしまった。

新編さん体制に入って作業を進めてから三年半、ここによりやく『苫小牧市史上巻』の発刊となったが、これにより佐藤、扇谷両編さん員の分担はすべて完了し、今後『下巻』、『資料編』については堀江編集長、神田編さん員を中心に進めることになっている。

この間、多くの人たちからご支援とご協力、そしてご指導とご助言をうけたが、とりわけ本市史監修者である高倉新一郎先生には終始ご迷惑をおかけしたにもかかわらず、変わらぬご指導をいただき、また、編さん委員のみなさまには貴重なご意見やいろいろとお世話をいただいたことに深く感謝申し上げますとともに、今後とも相変わらずご指導とご鞭撻をお願い申し上げる次第である。

昭和五十年三月二十日

苫小牧市史編さん室

苫小牧市史

上卷

昭和五十年三月三十一日発行

編集
発行

苫小牧市

監修

高倉新一郎(総括)
大場利夫(先史時代)

印刷

株式会社 須田製版

